

曲目の解説

シュトラウス一家について

ウィンナ・ワルツの基礎を築き、「ワルツの父」と言われたのがヨハン・シュトラウス一世です。代表作にはラデツキー行進曲があります。

彼には三人の息子がおり、長男がヨハン・シュトラウス二世。「ワルツの王」と称され、作品はワルツ「春の声」、ワルツ「美しく青きドナウ」、トリッチ・トラッチ・ポルカ、喜歌劇「こうもり」などをはじめとして、数え切れないほどあります。

二男がヨーゼフ・シュトラウスで、元々エンジニアの仕事をしていましたが兄が体調を崩し、代役をつとめたのをきっかけに音楽家として働くようになりました。鍛冶屋のポルカ、ワルツ「天体の音楽」などが有名です。

三男はハープ奏者でもあったエドゥアルト。作曲家としては兄たちほどの才能はありませんでしたが、オーケストラの統率に優れた能力を示し、指揮者としてウィーンの音楽界を支えました。

■交響詩「ツァラトゥストラはかく語りき」作品 30 R・シュトラウス

R・シュトラウスは1864年にミュンヘンに生まれた、ドイツ後期ロマン派を代表する作曲家。ウィーンのシュトラウス一家との血縁関係はありません。この作品は彼が32歳の頃、1896年に作曲されました。冒頭の序奏部分はスタンリー・キューブリックの映画「2001年宇宙の旅」に使用されたことでとりわけ有名になりました。曲名から分かるように、ドイツの哲学者フリードリヒ・ニーチェの同名著書に影響を受けて創作されたもので、調性と様々な動機を巧みに使い分けることで、旧来のキリスト教的価値観を超克して新たな価値を創造する「超人」の思想、円環する「永遠回帰」の世界観といった彼の哲学を表現しています。

■ワルツ「女学生」作品 191 エミール・ワルトイフェル

エミール・ワルトイフェルは19世紀フランスの作曲家であり、ウィーンのシュトラウス・ファミリー以外で現代も慕われている数少ないワルツの作曲家の一人です。「フランスのワルツ王」とも言われ、上品ながら親しみやすい旋律が特徴です。

ワルツ「女学生」はポール・ラーコム(1838-1920)という当時パリで大変人気のあったシャンソン作曲家の歌とスペインの民族的な旋律によって構成されたもの。原題“Estudiantina”とはスペイン語で〈学生の楽団〉という意味であり、明るく活気に満ちた様子が伝わってきます。

■歌劇「メリー・ウイドウ(陽気な未亡人)」よりワルツ フランツ・レハール

ウィーン・オペレッタはスッペやヨハン・シュトラウス2世がこの世を去った後、しばらく沈滞していましたが、この「メリー・ウイドウ」によって《白銀時代》と呼ばれる二度目の隆盛を迎えました。

フランツ・レハールはハンガリーに生まれた後、プラハで音楽を学び、地方の劇場でバイオリン奏者を勤めた後、ドヴォルザークの勧めもあって作曲をするようになりました。優れた脚本家の助けもあってウィーンで上演されたこのオペラは、連続500回の公演、さらには映画化に到るほどの大変な人気を得ました。

■ポルカ「狩りにて」作品 373 ヨハン・シュトラウス 2 世

この曲は自身のオペレッタ「ウィーンのカリオストロ」のなかの「おお、わたしの駿馬よ」という歌を素材としたもの。軽快に馬が疾走する様子に始まり、森の中で小動物や小鳥と出会います。金管楽器が狩りの始まりを告げるファンファーレを鳴らすと、馬を鞭打つ音、狩りで用いられる鉄砲の音も聴こえてきます。簡潔な作りではありますが、生き活きとした楽しげな狩りの様子が精妙に描かれており、当時 50 歳を迎えた「ワルツ王」の見事な手腕を聴きとることができるでしょう。

■アンネン・ポルカ 作品 117 ヨハン・シュトラウス 2 世

数多くのワルツ・ポルカを作り、「ワルツ王」と称賛されたヨハン・シュトラウス 2 世の作品の中でもとりわけ人気の高いポルカですが、作曲のいきさつは諸説あります。一説には彼に音楽教育を受けさせた母アンナに感謝の気持ちを込めて作曲されたと言われています。たしかに「年老いた母の手をとり、ゆっくりと歩く」ような温かさになあふれており、彼女のゆっくりとした足取りと、それを見守る家族の様子が聴こえてくるようです。

■ポルカ「鍛冶屋のポルカ」作品 269 ヨーゼフ・シュトラウス

ヨーゼフ・シュトラウスはヨハン 1 世の二男であり、ヨハン 2 世の弟。当初音楽家になる気はなく、工芸学校で学んだ後、工業技師として働いていましたが、兄のヨハン 2 世が体調を崩し代理として指揮をしたのをきっかけに転向、作曲と指揮で優れた業績を遺しました。とある金庫メーカーが二万個製造記念に花火大会を催そうと依頼したのが作曲の契機。金庫作りは鍛冶屋の仕事、そして鍛冶屋も花火大会もドイツ語では同じ“Feuerfest”であり、遊び心と意趣に満ちたこの曲は、鍛冶仕事の作業台である金床を用いるというアイデアにより、彼のポルカの中でも最も人気のあるものとなりました。

■トリッチ・トラッチ・ポルカ 作品 214 ヨハン・シュトラウス 2 世

1854 年、休養のために温泉地ガスタインを訪れたヨハン 2 世は、ロシアの鉄道会社からペテルブルクの社交界のために避暑地のパヴロフスクで演奏会の指揮をしてほしいという依頼を受けました。翌年から 15 年間、彼は毎年春にパヴロフスクに赴くことになりました。弟ヨーゼフとの合作「ピチカート・ポルカ」や「クラブフェンの森で」など、この毎年の旅行の中で生まれた名曲もたくさんあり、「トリッチ・トラッチ・ポルカ」もそのひとつです。

「トリッチ・トラッチ」とは、ぺちゃくちゃおしゃべりする様子のものであり、うわさ好きなウィーンの御婦人方のおしゃべりをユーモラスに描き出しています。3 分もかからないほどの大変短い曲ですが、単なる繰り返しは意外に少なく、贅沢に作られているのです。

■ポルカ「雷鳴と電光」作品 324 ヨハン・シュトラウス 2 世

ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団のニューイヤーコンサートでも度々演奏される、非常に人気のある曲。遠く雷のゴロゴロというどろきは太鼓であらわされ、電光はシンバルの鋭い響きで表現されています。とはいえ曲中に恐ろしげな部分や不安にさせるようなところはなく、スリルがありながらも明るく爽快な調子です。